

マレビトライブ 東京編 上演テキスト

「N市民 稲光は東京スカイツリーに兄のファルスを見た」

上演① 東武鉄道 亀戸線

亀戸駅改札、稲光は高校時代の友人野々宮のりりに会う

「こんにちは」

「こんにちは」

「野々宮さん」

「ええ」

「ああ。」

「緑下くん」

「そうそう」

「切符、買った？」

「あ、いや」

「じゃ。曳舟まで。わたし、これ、あるから」

「ああ、あ、はい」

亀戸線、電車内

「なんか、変わってないね」

「え、ああ、おれ」

「うん。元気そう」

「ああ、まあね、そうかな」

「ま、そんなにたってないから。でも、メールだけだと、わかんなくて」

「ああ。そうだよね」

「野々宮さんも元気そう、ちっとも、変わってない」

「え、あ、そう」

「みんな、どうしてんのかな。やっことか」

「さー」

「きよみさんとこ、やっこ、行ってるって聞いたけど。誰だったかな、誰か、そんなこと言っ
てただけどな」

「やっこ」

「うん、沢藤さん。沢藤靖子。2組だった」

「え、あ、ああ」

「すわる？」

「いやいや。まあ」

「鶴見さん、結婚するみたい」

「へー」

「あんまり、会わないの、むこうで、みんなと」

「うーん、そうね、あんまり、あわないかな」

「そう」

「スカイツリー、見た？」

「うん、見た見た」

「どうやって、来たの」

「え」

「東京」

「ああ」

「飛行機」

「いや」

「あ、新幹線」

「いや」

「バスで」

「ああ、高速バス、へー」

「そう、バスで大阪まで来て、それからまたバスで」

「え、あ、そう、すごい」

「新宿に到着いて」

「へー。じゃ、けっこうキツかった？」

「いや、まあまあ、なんとか」

「へー」

「私も、バスで静岡の友だちのところ行ったけど。寝られなかったら、大変よね」

「たこやきとか、食べて、は、は、は」

「え。たこやき？」

「うん、たこやきとか、食べて、大阪で」

「へー」

「もうすぐ。次かな」

「え、あ、はい」

「あんまり、このへん来ないから」

「へー」

上演② 東向島珈琲店

曳舟駅、近くの喫茶店、窓の外には公園が見える

「緑下くんは、その人のこと知ってる？」

「え、誰」

「その、お兄さんの、ファンって人」

「ファン」

「本人がそう言ってるらしくて」

「ああ、いや、知らないと思うけど」

「ここで、待ち合わせしてるから、もうすぐしたら来ると思う」

「え、その人が？」

「そう、たぶん、来ると思うけどな、そのファンさんも」

「ふーん」

「お兄さん、大変だったのね。私、知らなくて」

「ああ」

「私、びっくりしちゃった」

「うん」

「いや、まあ、そのうちひょっこり帰ってくるって思ってたんだけど」

「ああ」

「それに、まさか、殺したりとかは、ないかなって」

「ああ」

「うーん」

「なんか、ちょっと、こわいね」

「うーん」

「お兄さん、なにやってた人？」

「え、なんなんだろう、あの人」

「ファンがいるって、すごい」

「ああ。ま、おれはようわからんのだけど」

「わたし、ファンとか、いないし。お芝居してるのに」

「ああ、でも、いるんじゃないのかな」

「いるかな」

「いるんじゃない？」

「いるといいけど」

「いると思うよ」

「え、なんで」

「なんでって、なんか」

「テキトーなこと言ってるでしょ。そんなの、興味ないのに」

「ああ、いや、そんなことはないよ」

「いま、なんか、その人と、そのファンさん？ が、私の知り合いと一緒にいるらしくって、この辺り、かな、京島って言ってたけど、住んでるんだって、二人で」

「へー」

「で、その人、その人って一緒にいる人」

「ああ、はい」

「彼女は私の先輩だったんだけど、劇団の、一番よくしてくれて、ご飯とかよく一緒に行ってくれて、新宿で飲んだりとか、下北連れてってくれたりとか、してくれて、兵庫で生まれたって言ってたかな、でも、なんか、劇団ってあわないかなってなって、辞めたんだけど、このあいだ、ひさびさ携帯に着信あって、そしたら、なんか、おどろいて、緑下くんのこと知ってるでしょってなって、ああ、ええ、ええっ、知ってる知ってるって思って、それで私メールしたの、緑下くんに」

「へー。じゃ、その人も来るのかな、えっと、その先輩って人だけど」

「どうだろ、とにかく、ここで待ってればいいんじゃないかな」

「うん、ああ、はい」

「東京寒いでしょう」

「あ、うん、そうかな」

「このあいだ、雪ふって」

「あ、そう」

「マクベスって、知ってる？」

「あ、いや」

「シェイクスピアって、知ってる？」

「ああ、ま、名前だけは」

「このあいだ、やった芝居、マクベス」

「へー」

「マクベス夫人やったの」

「へー」

「50人くらいしか、入らない劇場なんだけど、お客さん、たくさん来てくれて」

「へー」

「ずいぶん帰ってないな、N市」

「なーんか、こんなに寒くないんだろうな」

稲光は窓の外の公園のベンチに陽の幽霊を見つける。そして、これから幾日かを過ごす東京での日々、兄さんの幽霊は、こんな風におれについてまわるんだろうな、そしてこのまるで人間の人生のようなはかり知れないほどのこの大きな街で、兄さんは確実に息の根を止められたんだろうな、と一人感慨に耽ったが、そんなことを、野々宮のりりに言ったとしても理解してもらいそうにないなと、思い、沈黙を押し通すことにする

「あ」

「え、どうしたの」

「うん？あ。いや」

「旦那さんにね、そんなにいろいろ悩むんだったら、いっそのこと殺したらいいじゃないって、言うのよ」

「え」

「私の役、マクベス夫人」

「ああ」

「殺せ殺せて、そそのかすっていうか、でも、実際のことって、わからないよね。なんていうのかな、役でだったら、彼女のこともわかるんだけど、なんか、私のそそのかしにのって、あっさり旦那はどんどん、人、殺したりするんだけど、で、結局殺した人の亡霊におびえたりして、ばかじゃないのーって思うんだけど、ああ、でも実際はそうなるんだろうなって、役になりきってる時はそう思ったけど、でも、でも、実際の実際はどうなんだろうって。人が一人殺されるって、どういうことなんだろうって」

野々宮のりりの携帯に着信があり、野々宮はその相手と喋る、相手は劇団の元先輩女優であり、いまはファンの愛人でもある、百竹智代である

「あ、はい、野々宮です。おはようございます。はい、はい、あ、いますよ。ええ、いま、東向島珈琲に、奥の、そうそう、そう、ええ、一緒に来て、います彼も。はい、ええ、ええ、あ、そうなんですか。ああ、そうですか、ああ。……いや、はい、大丈夫です、ああ、でも、わたし、これからバイトなんで、ええ、ええ、……あ、でも、なんとか、はい、大丈夫です、わかりました、ええ、わかりました、明日ですね、あ、はい、また、連絡します、あ、はい、はい、じゃ、またー」

「なんか、今日は、来られないんだって。なんか、急に用事ができて」

「え、あ、そう」

「明日なら、会えるって」

「ああ、そっか」

「せっかく、東京まで来たのにね、今日会えたら、よかったんだけど、そしたら、すぐお兄さんのこともわかったのに」

「ああ」

「どうする」

「うーん」

「今日、泊まるとことか」

「ああ、そうか……」

「明日からはあるって言ってたけど、なんか、泊まること」

「あ、そう」

「まあ、なんとか、どっか、さがすから、今日は、大丈夫だよ」

「うちに来てもらってもいいけど、これからバイトだから」

「ああ、いやいや、ありがとう、いいよいいよ」

「じゃ、出ようか」

「うん」

上演③ 京成橋

稲光は京成橋で、陽のファンだった男とその愛人百竹智代に会う

「どうもどうも。あ、弟さん」

「ええ、稲光です」

「はじめまして、だっけ」

「ああ。どうでしたっけ」

「かわいっ」

「なんか、全然似てない。全然似てない、あにきにぜんぜん」

「え、兄弟なんでしょう。男の兄弟って似てるって言うけど、あんた、兄弟いたっけ」

「いないよう」

「きゃーーーーー」

「きのう、どこ泊まったの」

「ああ。マンガ喫茶に」

「兄弟舟、なんしゅって、しゅっしゅっ、びゅっ」

「ああ、ああ」

「ああ。そう、錦糸町とか」

「え」

「まんきつ」

「ああ、まあ、そうですかね」

「ごめんなさいね、昨日行けなくて」

「いえいえ」

「この人が悪いのですー」

「なんで」

「でりやでりやー」

「え、、、」

「かわいい」

「やめよやめよ」

「さむいー」

「いこいこ、早く、行こう」

「いこういこう、しゃめしゃめー」

「のりりちゃん、あった」

「え」

「野々宮のりりちゃん」

「ああ、ええ」

「あそこ大きいよね」

「ああ」

「私も、人のこと言えないけど、スカイツリースカイツリー、しゃめしゃめ。鏡おじさん、いないかなー」

「こっち」

「あ、はい」

「なんか。コッチに兄さんの所属してた組織の本部あるって聞いて、調べてたんだけど。もう東京来て、三ヶ月くらいになるかな。ああ、さむいから、ま、歩きながら話そう」

「あ、はい」

「私ね、お店出すんだけど、そこ、いま、改装中で、そこ今日から使っていいから」

「今日から」

「しばらくいるんでしょう、こっち」

「え、あ、いや」

「だって、まあ、いたらいいじゃないか、せっかく来たんだし」

「そうよ、せっかくきたんだしー。金魚とか見てったら」

「ええ、なに、きんぎょって」

「下町情緒」

「あ、でも、ま、兄のことが整理ついたら帰ろうとは思ってましたけど」

「そうか、そうだね」

「そうか、そうだね」

「こら」

「で、兄は、その、いま」

「ああ、ま、話すよ、行こう」

「あ、はい」

昭和のウルトラマンが京島のほうから現れ、スカイツリーのほうへゆっくと自転車で乗って
去ってゆく 稲光はその光景に一瞬目を奪われる

「稲光くん、こっちこっち」

「かわあいいいー」

上演④ 京島キラキラ橘商店街周辺

稲光の仮の宿では、来訪者が稲光相手に次のようなことを語る

なぜ、こんなところで寝泊まりしているのか。

どこから来たのか。

東京の印象はどうか。

寒くはないか。

自分の紹介と大事にしている哲学を、なにか一つ、語る。

なにか好きなことでもいい。たとえば、映画や音楽の話。

あなたの好きなことはなにか。と稲光に質問すると、テープレコーダーに自分の声で街の描写を吹き込むことです、というような応答をするはずなので、それを聞かせてもらい、ひとことコメントする。

なぜ、二階で寝ないのか、二階のほうが快適ではないのか。と訊く。すると稲光は、「二階には兄の幽霊が出るのです」と応えるので、二階に稲光と一緒に見に行く。すると、誰もいない（実際には陽の幽霊が窓辺でタバコを吸っていたりする）が、稲光には見えるようなので、少し恐ろしくなり、じゃ、またね、と言って帰ってゆく。

百竹智代とファンの愛の巣

「どうするの」

「どうしよう」

「どうなってるのかな」

「なにが」

「どうにかするっていったよ」

「だれが、おれ」

「どうにかするよーどうのかするから、さー、さー、しばらくおいてくれよー」

「こら」

「こら。てへ」

「明日また言ってみる」

「あしたあしたって、明日病か」

「え」

「明日病、あすへのやまい」

「え、そんなのあるの」

「ありません」

「なんなんだ」

「もうそろそろ、あのひとも帰って来ると思うけど」

「え、あ、そうなの」

「あした、とか、あさってのことじゃないとは思うのよ、思うけど、思うけどよ」

「そう」

「向こうの仕事けりついたって、連絡あったみたい」

「あ、そうなの」

「ふあ、そうなのよ？」

「こら」

「でりゃあ」

「しばらく、大丈夫って、言ってたから、大丈夫ってことだと思い込んでた」

「え、いま、なんか、言った？」

「言ったかも」

「はーあ、もう、おしあげっ」

「ああ、ほら、髪型が、なんか、ほら、おしなりくんみたいって、言おうとしたら」

「え、ええ、え？」

「はなわくんだった、まるこちゃんの、ああ、あぶなかったあ」

「ああ、ああ、おれの」

「で、で、私、ずーっとおしなりくんって思ってて、おしなりくんって、言おうとしたら、違う、おしなりくんじゃないっ、まちがっちゃ、二人ともに失礼だわって思って、ふたりともって、あんたとおしなりくんじゃないよ、あんたとはなわくんでもないよ。おしなりくんとはなわくんにだよ。失礼でしょ、まちがえちゃ。でも、その髪型、どっから、どう見てもはなわくんでしょどちらかといったらよ、はなわくんでしょ、おしなりくんじゃなくって、でも、それを、おしなりくんってまちがえて、ああああ、ああああ、お腹痛い」

「ええ、ええ、ああ、ああ」

「もう帰ったら」

「もう帰ったほうがいいよ」

「N市に」

「外で吸ってよ」

「どうにかしなきゃ」

「ああ、まあ、どうにかしなきゃね」

「どう、どうにかするの」

「ま、とりあえず、どうにかするよ」

「あんたさ、なんか、顔がさ、なんかさ、どうにかしなきゃっ、って顔してるよ」

「え、鏡鏡」

「あいつ、あきらかに、金ないじゃん」

「ありそうな面構えしてないよ」

「なりだって、金なんかこれっぽっちもなさそうじゃん」

「びゅんびゅん、ふりまわしたって、なーんも出て来ないよ」

「彼の親父さんさ、学校の先生してたんだよ。実家にたのめばなんとかしてくれるんじゃないかな」

「あーあーあーあーいかんいかん。心が荒む」

「あ、それからさ、あんたさ、子供に駄菓子買ってあげんの、やめてよ」

「鳩が、いるからさ、公園に」

「ばかか」

「鳩でも食ってろ」

「え、どっか、行くの」

「ちょっと、のりりと会う」

「あ、そう」

「そこまで迎えに行ってくる」

愛の巣にて、百竹智代と野々宮のりりの会話

「このへんですか、緑下くんの泊まってる所って」

「うん、ま、この近く。商店街ぬけたとこ」

「あ、そうですか。いるかな」

「いると思うけど」

「あの、場所、教えてくれませんか」

「うん。いいよ」

「ちょっとだけ、心配になって」

「どうして。大丈夫よ」

「なに、そんなことで来たの」

「あ、いや、それもあったけど、智代さんにも会えるかなって」

「お兄さんのこと、どうになりました」

「どうって」

「死体見つかりました」

「ああ、そんなのあるわけないよ」

「え」

「あ、そうか」

「水を入れた鍋を火にかけ、一枚の昆布を浮かす、湯が煮立ち、昆布が浮きあがるのを待って、かつお節を入れ、火をとめる。塩をひとつまみ入れ、二、三滴の酒と醤油をたらして、再びちよっと煮立たせる。今度は、小さな切手ほどの焼き餅と鳥のささみと、かまぼこと、結び三つ葉を盛り込んだ椀の中に、そのスープを静かに張る。そしてお膳にのせる。ソギ柚子と、針に切った焼きのりを餅の上に三角に盛りあげる」

「お雑煮って作ったことある」

「ないです」

「私もない」

「どちらかと言えば、嫌いです」

「私も嫌い。とくに、自分とこの雑煮自慢するやつがだいきらい」

「作ったんですか」

「いや。だから、つくったことないって」

「まるで、つくったことあるみたいじゃないですか」

「本に書いてあること、まるおぼえして、覚えた」

「へー。なんでそんなことするんです」

「実際、作るより、絶対おいしそう」

「えー」

「おいしそうより、おいしいほうがいいですよ」

「うるさいな」

「かんさいふーとか、かんとうふーとか、めっちゃいや」

「死体なんてないよ。ないけどあのひと稲光くん呼んだんだよ、わざわざ」

「あの人って、ファンさんですか」

「そんなの都合よくないですか」

「のりりも共犯者でしょ」

「なんで」

「わたしたちでしょ。ここまで、彼、連れて来たの」

「明治通りのほうに行ったらいいですか」

「じゃ、私も行くから」

百竹智代と野々宮のりりは商店街を歩き、稲光の宿へ。稲光はいない。二人でテープレコーダーの声を聞く。

「図書館で読んだ本からの引用。真実と虚偽の混淆においては、真実は虚偽を際立たせ、虚偽は真実を信じることを妨げる。本物の嵐で難破した本物の船の甲板に立って、遭難の恐怖を演じてみせている一人の俳優。われわれは俳優も、船も、嵐も信じない」

愛の巣にて、ファンと稲光の会話

「ごはん、食べた」

「ええ」

「なんか、飲む。コーヒーとか」

「あ、はい」

「兄がこのあたりで死んでいることはわかりました」

「あなたが言ったからじゃなく、幽霊の兄を見たからです」

「頭がウルトラマンのときもありました」

「兄がぼくを呼んでるんだと思います」

「どこに埋まっているかだけでも、教えてくれたら、納得して帰ります。N市に」

「地図とか、描いてください。でたらめで、かまいませんから」

ファンは、そこに死体が埋まっているであろう地図を描く

「もう暗いから、明日にしたら」

「あ、でも、お願いします」

「ありがとうございました。行ってみます」

マンモス公園、天使のうた

「このうたは、むかしむかし、街で覚えました。あー 江戸の街かーら栄えー栄えーてえ 大
東京 スカイツリーも ヨツ！ 世界一 でかいもの好き 家康公も芯柱にゃよー 驚いたよ
ーーおお コーセミコーセミ チュルンチュルン あー なにしおーわーば いざこととわん
スカイツリー 天まで届け都の空にーいー 在りや無しやの ナリヒラさんも歌を読み詠み眺
めーてーるーうう コーセミコーセミ チュルンチュルン あー 千代に八千代に 栄えー栄
えーてえ 大東京 スカイツリーも ヨツ！ 末永く 物見遊山の武蔵の人もびっくり眼でよ
ー たーまげーたーよーーおお コーセミコーセミ チュルンチュルン あー 墨田名物 比
肩無双のスカイツリー 古今東西 名を残すー 富嶽百景 北斎さんも 描きたかったよー
浮世絵にーーいい コーセミコーセミ チュルンチュルン」

廃屋。ゴミの山。稲光が兄の死体を探している。懐中電灯の明かり。やがて、野々宮のりりが来る

「緑下くん」

「緑下くん」

「緑下くん」

「あ、野々宮さん」

「どっか、行こうよ」

「なんか、食べよう」

「あ、大丈夫。もうちょっと、ここにいるから」

「東京、いつまでいるの」

「わからない」

「また、メールするね」

稲光は、一人、探し続ける

引用文献：『わたしの渡世日記』（高峰秀子 著）より

『シネマトグラフ覚書』（ロベール・ブレッソン 著／松浦寿輝 訳）より

引用歌： 「江戸 東京スカイツリー 都節」（下釜昭則 作詞・作曲）より